

死刑執行中 脱獄進行中

原作
荒木飛呂彦
短篇集「死刑執行中脱獄進行中」(集英社)

主演
森山未来

森山未来インタビュー

取材・文=高橋彩子

舞台でも映像でも唯一無二の存在感を放ち、見る者を引きつける森山未来。彼の現在を語る上で欠かせないのが、2013年10月から約1年間、文化庁の文化交流使としてイスラエルに渡り、インバル・ピント&アブシャロム・ポラック・ダンスカンパニーで活動した体験だろう。イスラエルでの日々を「純粋に表現だけを楽しめる、のんびりした時間だった」と振り返る森山が、帰国後満1年となる今年11月、舞台『死刑執行中脱獄進行中』に主演する。原作は「死刑執行中脱獄進行中 荒木飛呂彦短編集」の収録作より、囚人が牢獄内にしかけられた処刑道具に次々と襲われていく表題作と、海で遭難し、ヨット上で救助を待つ男と猫の物語『ドルチ』の2篇だ。

「2篇のうち『死刑執行中脱獄進行中』は、僕が好きな映像作家ヤン・シュヴァンクマイエルの『部屋』という作品に似たところがあって。あれを見た時、彼はチェコの人だから、二重生活の閉塞感の中で身を削られていく感覚がよくわかったんです。一方、荒木さんの作品はまた違う結末で、囚人が外の世界に出る機会をうかがいながら、何十年もその手前にとどまっている。自由という概念って、何も無い野原に放り出されるより、枠組みの中においてこそ生まれるんだなあと感じます。今回はそこにさらに『ドルチ』が絡まって、一つの世界を構築します」



撮影：石阪大輔

構成・演出・振付を手がける長谷川寧とは、かねてから親交があるという。

「2010年に『変身』の楽屋で会って以来、お互いに舞台を観に行っていて、寧さん率いる富士山アネットの舞台『Woyzeck/W』の稽古に2日間だけ参加したこともあるんです。仕事としては、映画&ドラマ『モテキ』のオープニング曲であるフジファブリック《夜明けのBEAT》のPVで振付を担当してもらいました。(漫画が原作という点で共通する)舞台『プルートウ PLUTO』では、演出・振付のシディ・ラルビ・シェルカウイが漫画に対して憧れをもっていたので、コマ割りのアイデアなどを使いましたが、クリエイターによってアプローチは変わるので、寧さんがどうするのか楽しみです」

稽古開始はまだ先だが、既に数回、ワークショップが行われた。「紙のような素材を波に見立てたり、そこに映像を投射したりと、かなりトリッキーな見せ方になりそうです。僕のほかに台詞のないダンサー達が出演するのですが、彼らの身体でトラップ(処刑道具)を表現するようなことも試しました。いずれにしても大切なのは、荒木さんの漫画の世界を、舞台としてどうかたちにするか。“ジョジョ立ち”をすればいいというものではなく、荒木さん特有の、鏡の前に立ってポーズを取っているようなナルシズムや、世界を歪ませる摩訶不思議な様式美を、表現できればと考えています。きょうび、漫画が原作の舞台はものすごく多いので、漫画だから特別にどう、ということはないですけども、例えば映像は、漫画の画角を忠実に再現できるし、海なら海を実際に存在させられるのに対して、舞台で本当の海を作ることはできない。まず作り手が想像力を駆使しなければならないからこそ、舞台では、より“遊べる”のかもかもしれませんよね」

イスラエルでの姿をとらえたドキュメンタリー番組の中では「単純に純粋に、面白い仕事だけやりたい」と発言していた森山。

「できていると思います。ただ、やりたいことが多過ぎて、自分の中で收拾がつかなくなりつつあるというか、自分で自分をすごく忙しくしちゃって大変で(笑)。ちょっとバランスを考えなければいけないのですが、全部やりたいことなので楽しいです」

充実した日々の中、どのような舞台版『死刑執行中脱獄進行中』が誕生するのか。しかと見届けたい。